

# ひるの星

No. 237

## もくじ

バハオラの <sup>ことば</sup> 言葉 .....	2
<sup>ことば</sup> 言葉の <sup>いみ</sup> 意味.....	3
三つのお話.....	4
クイズ .....	9
<sup>てん</sup> 点で <sup>え</sup> なぞる絵.....	10
葉っぱの <sup>つく</sup> 絵を作ろう.....	11
ウインタースクール <sup>しゃしん</sup> 写真 .....	14
ウインタースクールのアート.....	15
<sup>りょうしん</sup> 両親のページ .....	16

まさ かみ めい  
「正に神の命により

なんじ つか  
汝は遣わされた。

かみ はな  
神のことを話すために

なんじ あら  
汝は現わされた。

けいあい さいあい かみ  
敬愛する、最愛なる神に

つか なんじ そうぞう  
仕えるために汝は創造さ

れた。」 \* -バハオラ-

## 文の意味

赤ちゃんが生まれると、バハイのお父さんは赤ちゃんの耳元で3回この引用文をささやきます。これが赤ちゃんの聞く最初の言葉です。第一の引用文は、神様が望まれて私たちみんながこの世に生まれたと告げられています。第二の引用文は、私たちみんなは、いつも神様のことを忘れずに話すようにと教えられています。第三の引用文は、神様は私たちみんなを愛されています。この愛で神様は私たちをいつも見守ってくださっています。だから神様のこの愛に応えて神様に従うようにと教えられています。

毎日これを思い起こすことは私たちにとっても役に立ちます。こうすることだけが正しいと私たちが確信できるのは、神様の言葉を伝えることができる神の顕示者がいらっしゃるからです。神の顕示者とは誰でしょう？それはモーゼ、仏陀、キリスト、マホメット、そしてバブ、バハオラなどです。バハオラが一番新しい先生で、神様の一番新しい言葉を持って来られました。私たちはバハオラから神様の言葉を学びます。

大人のバハイは毎日「必須の祈り」\*をします。このお祈りは何故神様が私たちを創造されたのか、この世では私たちは毎日何をしなければいけないかを思い起こさせてくれます。必須は「必ずしなければいけない。」という意味です。ちょうど私たちの健やかな活動のために毎日食事が必要なのも同じく、私たちの魂は神様の言葉が毎日必要なのです。さもないと魂は枯れてしまいます。

そうなる<sup>わたし</sup>と<sup>み</sup>私<sup>み</sup>たちの<sup>み</sup>身<sup>み</sup>も<sup>こころ</sup>心<sup>み</sup>も<sup>かつどう</sup>活動<sup>み</sup>し<sup>み</sup>な<sup>み</sup>く<sup>み</sup>な<sup>み</sup>ります。神<sup>かみさま</sup>様の<sup>ことば</sup>言<sup>ことば</sup>葉<sup>ことば</sup>と<sup>まいにち</sup>毎<sup>まいにち</sup>日<sup>まいにち</sup>親<sup>した</sup>し<sup>した</sup>む<sup>した</sup>こ

と<sup>わたし</sup>によ<sup>わたし</sup>って<sup>わたし</sup>私<sup>わたし</sup>た<sup>わたし</sup>ち<sup>わたし</sup>は<sup>わたし</sup>神<sup>かみさま</sup>様<sup>かみさま</sup>に<sup>かみさま</sup>向<sup>む</sup>か<sup>む</sup>っ<sup>む</sup>て<sup>む</sup>毎<sup>まいにち</sup>日<sup>まいにち</sup>正<sup>ただ</sup>し<sup>ただ</sup>い<sup>ただ</sup>道<sup>みち</sup>を<sup>みち</sup>歩<sup>あゆ</sup>む<sup>あゆ</sup>こ<sup>あゆ</sup>と<sup>あゆ</sup>が<sup>あゆ</sup>出<sup>でき</sup>る<sup>でき</sup>の<sup>でき</sup>で<sup>でき</sup>す。



この<sup>あと</sup>後<sup>ただ</sup>、<sup>みち</sup>正<sup>みち</sup>し<sup>みち</sup>い<sup>みち</sup>道<sup>あゆ</sup>を<sup>あゆ</sup>歩<sup>あゆ</sup>む<sup>あゆ</sup>子<sup>あゆ</sup>供<sup>あゆ</sup>の<sup>あゆ</sup>お<sup>あゆ</sup>話<sup>あゆ</sup>が<sup>あゆ</sup>あ<sup>あゆ</sup>り<sup>あゆ</sup>ま<sup>あゆ</sup>す。子<sup>あゆ</sup>供<sup>あゆ</sup>た<sup>あゆ</sup>ち<sup>あゆ</sup>が<sup>あゆ</sup>ど<sup>あゆ</sup>う<sup>あゆ</sup>や<sup>あゆ</sup>っ<sup>あゆ</sup>て<sup>あゆ</sup>正<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>く<sup>あゆ</sup>

い<sup>あゆ</sup>道<sup>あゆ</sup>に<sup>あゆ</sup>進<sup>あゆ</sup>ん<sup>あゆ</sup>だ<sup>あゆ</sup>か<sup>あゆ</sup>自<sup>あゆ</sup>分<sup>あゆ</sup>で<sup>あゆ</sup>確<sup>あゆ</sup>か<sup>あゆ</sup>め<sup>あゆ</sup>ま<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>よ<sup>あゆ</sup>う<sup>あゆ</sup>。そ<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>て<sup>あゆ</sup>自<sup>あゆ</sup>分<sup>あゆ</sup>も<sup>あゆ</sup>正<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>い<sup>あゆ</sup>道<sup>あゆ</sup>を<sup>あゆ</sup>進<sup>あゆ</sup>む<sup>あゆ</sup>よ<sup>あゆ</sup>う<sup>あゆ</sup>に<sup>あゆ</sup>考<sup>あゆ</sup>

え<sup>あゆ</sup>て<sup>あゆ</sup>み<sup>あゆ</sup>ま<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>よ<sup>あゆ</sup>う<sup>あゆ</sup>。後<sup>あゆ</sup>で<sup>あゆ</sup>子<sup>あゆ</sup>供<sup>あゆ</sup>た<sup>あゆ</sup>ち<sup>あゆ</sup>の<sup>あゆ</sup>お<sup>あゆ</sup>話<sup>あゆ</sup>の<sup>あゆ</sup>ク<sup>あゆ</sup>イ<sup>あゆ</sup>ズ<sup>あゆ</sup>が<sup>あゆ</sup>出<sup>あゆ</sup>て<sup>あゆ</sup>く<sup>あゆ</sup>る<sup>あゆ</sup>の<sup>あゆ</sup>で<sup>あゆ</sup>挑<sup>あゆ</sup>戦<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>て<sup>あゆ</sup>み<sup>あゆ</sup>ま<sup>あゆ</sup>し<sup>あゆ</sup>よ<sup>あゆ</sup>う<sup>あゆ</sup>。





## 泣かないで

昔、可愛い女の子が沖縄の南の島にやって来ました。女の子の名前はシリン

といました。シリンのお父さんとお母さんはアメリカ人でした。シリンは島の

幼稚園に行くことになりました。幼稚園に行くのは、シリンはとてもこわがっ

ていました。シリンは英語しか話せなかったからです。お父さんもお母さんも

英語しか話さなかったし、シリンに英語で話しかけてくれる人は誰もいなかった

からです。最初の日、幼稚園の子供たちはシリンの周りにドッと集まって来ま

した。そしてシリンの金髪に触ろうとしたり、まん丸い目をじっと見つめたり

しました。シリンの明るい色が珍しかったのです。これは、シリンを怖がらせ

てしまいました。お母さんが帰ってしまうとシリンはもう我慢できなくなりま

した。そしてとうとう泣き出してしまいました。それを見て子供たちは驚きま

した。「どうしてこの女の子は泣き出したのだろう？」「みんなこの子が好きな

のに。」「泣かないで。何もしないよ。」と子供たちが一斉にしゃべり出しました。

これがますますシリンを怖がらせててしまいました。これを見つけた、子供の世話

が上手な先生がかけよってシリンを抱きしめました。そして子供たちに言いま

した。「ねえ、みんなシリンに”I love you”と言ってごらん。」<sup>こども</sup>子供たちは初めて  
の<sup>えいご</sup>英語でシリンに<sup>む</sup>向かって”I love you.”<sup>い</sup>と言ってみました。するとシリンはにっ  
こりしました。シリンも<sup>こども</sup>子供たちも<sup>なかよ</sup>仲良くなってみんなで楽しく遊<sup>あそ</sup>びました。  
シリンが<sup>ことば</sup>言葉をわからなくて泣<sup>な</sup>き出しそうになる<sup>たび</sup>度に<sup>こども</sup>子供たちは”I love you.”  
という<sup>まほう</sup>魔法の<sup>ことば</sup>言葉を使<sup>つか</sup>いました。

それから<sup>いちねん</sup>一年が経<sup>た</sup>って、その<sup>しょうがくいちねんせい</sup>みんながもうすぐ小学一年生になろうとする<sup>ころ</sup>頃、  
<sup>せんせい</sup>先生が<sup>せんせい</sup>クラスの<sup>みんな</sup>みんなが<sup>なら</sup>習<sup>まほう</sup>った魔法の<sup>えいご</sup>英語”I love you,”の<sup>いみ</sup>意味を<sup>こども</sup>子供たちにた  
ずねました。すると<sup>こども</sup>子供たちはみんなで「泣<sup>な</sup>かないで、<sup>いみ</sup>という意味です。」と答  
え<sup>こた</sup>ました。それを<sup>き</sup>聞いて<sup>せんせい</sup>先生は可笑<sup>おか</sup>しくて吹<sup>ふ</sup>き出してしまいました。<sup>せんせい</sup>先生は思<sup>おも</sup>  
<sup>だ</sup>出し笑<sup>わら</sup>いをしながら<sup>ひと</sup>独<sup>げん</sup>り言<sup>い</sup>のように言<sup>し</sup>いました。「そうね。そうかも知<sup>し</sup>れないわ  
ね。」



にんぎょう  
人形

サラが<sup>10さい</sup>10才の<sup>ころ</sup>頃、サラの<sup>おばさん</sup>おばさんは、<sup>むすめ</sup>娘のメアリーとサラを<sup>つ</sup>連れて<sup>まち</sup>街はず  
れのおばさんの<sup>ゆうじん</sup>友人を<sup>たず</sup>訪ねました。メアリーは、その<sup>7さい</sup>とき7才でした。メアリ

一はサラが一緒に来ると聞いて大喜びでした。おばさんの友人の家に着くと、おばさんたちはお茶を飲みながらおしゃべりを始めました。サラとメアリーもおばさんたちを真似て小さなレディ気取りでした。でもお茶を飲んだ後すぐに退屈になってきました。あたりを見回すと、その家の棚やテーブルの上には二人の心を躍らせるような小物がたくさん飾られていました。「見て、メアリー、かわいいセラミックのお馬があるわ。」今度はメアリーが何かを見つけました。それは数匹の、かわいい子猫の飾り物でした。彼女には、それらがまるで生きていて、遊んでいるように見えました。サラが言いました。「触らないで。壊しでもしたら大変なことになるわよ。」メアリーのお母さんが言いました。「さあ行きましょう。二人とも上着を着なさい。」二人が上着を身につけたとき、おばさんのやさしい友人は部屋にもどって二つのおみやげを女の子たちに持って来ました。一つは本棚にあった木彫りの宝石箱で、もう一つは美しい昔のお人形でした。それらはいずれ劣らず素晴らしい物でした。



しかし二人とも美しい昔のお人形の方に目を奪われていました。それはセラミックの美しい顔と昔のファッションのヴェルヴェットのドレスを着ていました。サラとメアリーは笑みを浮かべながら甘くやさしい声で言いました。「ありがとうございます、おばさん。」でも帰る支度で車に乗り込むや否や、それまでの礼儀正

しきはたちまち消えてしまっていました。「ねえ、人形をもらったのは私よ。」

とメアリーが叫びました。「いいえ、それは違うわ。私がもらったのよ。」とサ

ラが叫びました。「だって私がお人形がいいと言ったからなのよ。だから私が

もらったのよ。」とサラが強い声で言いました。「私が小さい女の子なのよ。人形

は小さい女の子のものなのよ。だから私がもらうべきなのよ。」とメアリーが叫

びました。メアリーのお母さんはこれを聞いてとても怒りました。それでも二人

の女の子は言い争っていました。突然これといった理由もなくメアリーがとて

も行儀よく言いました。「どうぞ、サラ、あなたが人形をもらっていいのよ。私

は宝石箱の方にするから。」サラは喜んで人形を抱き寄せました。それで車の中

は静かになりました。しばらくするとサラは何となく気分が落ち着きませんで

した。サラは、ふとバハイ子供クラスで、「他の人への思いやり」について習っ

たことを思い出しました。メアリーは自分より年下なのに、この学習をちゃん

と習っているではありませんか。それを考えるとサラはますます落ち着かなく

なりました。その美しい人形はもはやサラを楽しませなくなりました。それは

ただサラの大人気ない事をしたというのを思い出させるだけでした。

この教訓はサラの人生でいつまでも残りました。この人形のことはサラが

大人になってもときどき思い出されるのでした。この教訓から、自分よりも相手

のことを先ず考えるようになりました。これは人生で最高の幸せをもたらすと

いうことを悟りました。



## 漢字テスト

ある時、日本の北の地方に一人の女の子が住んでいました。女の子の名前はアドラと言いました。女の子のお父さんとお母さんはイラン人でした。アドラは日本生まれの日本育ちでした。アドラは学校の成績を上げるのに一生懸命でした。でもなかなか成績は上がりませんでした。家庭ではペルシャ語しか使わなかったし、いくら日本語が流ちょうに話せても学校の成績は読み書き次第だからです。一番問題なのは漢字でした。

漢字テストの前日、アドラの家で夜遅くまでお客さんがいました。テストの準備をするつもりだったけど、あまりできませんでした。



テストの日、やはり漢字の読み方に自信がありませんでした。そんなときアドラの前の男の子が消しゴムを床に落としてしまいました。そして消しゴムを拾おうとして前かがみになっていました。アドラは、その様子を見ていて、ふと男の子の答案を目にしました。この男の子はクラスで一番成績が良い子でした。

「おや、まあ。」アドラは心の中で驚きの声を上げました。アドラの心が

じもんじとう おとこ こ こたえ こた ちが おとこ こ  
自問自答しました。「男の子の答えはわたしの答えと違っているわ。だけど男の子  
かた ただ ちが まよ  
の方が正しいに違いないわ。」アドラはとても迷いました。どうしてもこのテス  
よ せいせき おも だれ じぶん こたえ  
トで良い成績をとりたっていました。誰もわからないのだから自分の答  
おとこ こ こたえ かんたん じぶん こたえ け おとこ  
ではなく男の子の答にするのは簡単でした。アドラは自分の答を消して男の  
こ こたえ  
子の答にしようとしました。

そのときアドラはバハオラの言葉を思い出しました。「汝の目を清らかにし、手を  
ちゅうじつ した しんじつ かた こころ けいはつ われ  
忠実にし、舌に真実を語らせ、心を啓発させよ。」そこでアドラは、ハッと我にかえっ

じぶん じしん こたえ まちが こたえ  
て自分自身の答のままにすることにしました。たとえそれが間違いの答だとし

ひ ことば したが うれ あしと かる いえ かえ  
てもその日アドラはバハオラの言葉に従った嬉しさで、足取りも軽く家に帰り

じぶん けつだん よろこ いえ つ かあ うで  
ました。自分の決断に喜んだからです。アドラは家に着くとお母さんの腕の

なか と こ い み かあ わたし かんじ 100てん  
中に飛び込んで行きました。「見て、お母さん、私ね、漢字テスト100点とっ

せいせき いちばん おとこ こ どうあん み  
たわよ。テストのときクラスで成績一番の男の子の答案が見えちゃったけど、

わたし こたえ かた ただ  
私の答の方が正しかったのよ。すごいでしょ。」

ほんとう よ きょうくん まな かんじ よ かた こころ よ かた  
アドラは本当に良い教訓を学びました。漢字の読み方だけでなく、心の読み方も

まな  
学んだのです。

## クイズ

1. お父さんが赤ちゃんの耳元でバハイの引用文をささやくのは、いつですか？

---

2. なぜお父さんはそんなことをするのでしょうか？

---

3. 引用文で言われている、私たちが創造された理由とは何でしょうか？

---

4. 引用文によると、私たちはいつもどうすべきなのでしょう？

---

5. 私たちが毎日どのように行動すべきか誰から学んでいるのでしょうか？

---

6. 物語「泣かないで」で幼稚園の子供たちは何を学んだのでしょうか？

---

7. 物語「人形」でサラは何を学んだのでしょうか？

---

8. 物語「漢字テスト」でアドラは何を学んだのでしょうか？

---

9. みなさんの物語のような体験を「星の星」に教えてくださいませんか？

---



どう？ みんな上手く答えられましたか？

解答例は両親のページにあります。

てん え  
点でなぞる絵

じゅん てん  
ABCの順に点をつなごう。





## 引用文かざりの作り方

1. 用意するものクッキングシート、ティッシュ、木工用ボンド（白）、筆ペン、直径1cm長さ、25cmの棒、ドライフラワーまたは葉っぱ
2. 引用文（大きさは自由）の上にクッキングシートをかぶせる。引用文の文字を筆ペンでなぞる。引用文は全文ではなく、二つか三つの文を選ぶだけ。
3. 引用文の周りにドライフラワーとか葉っぱで飾って糊づけする。
4. 引用文の上下に2本の棒をボンドで貼り付ける。
5. 2枚重ねのティッシュの1枚を引用文とドライフラワーや葉っぱにかぶせる。
6. コップにテーブルスプーン2杯のボンドを入れ、水で薄める。
7. 5のティッシュの上に、6の水で薄めたボンドを太めの絵筆で引き伸ばす。
8. ボンドが乾いてきて文字やドライフラワーなどがはっきり見えてきたら、出来上がりです。



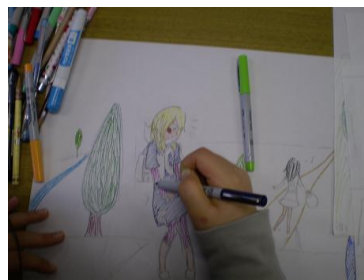
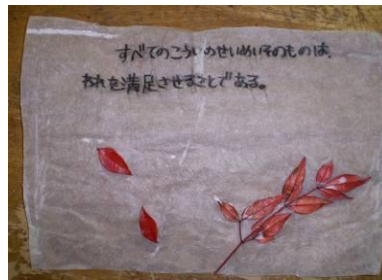
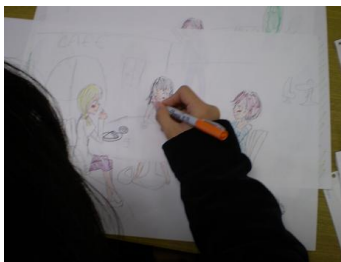
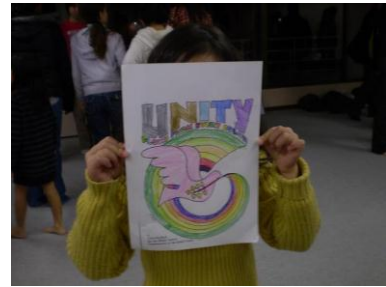
この手芸はアナ・ガードナちゃんのお母さん、カレンさんが教えてくさいました。

おも  
で  
思い出のウインタースクール





ウインタースクールの作品 さくひん





## 両親のページ

子供時代（11才位まで）は人生で最も美德を習いやすいときです。美德を身につけると健全で幸福な人生を送ることができます。子供が間違いを起こすと両親はつい感情的になってしまいます。そのとき落ち着いて子供に何の美德が欠けているのか考えさせましょう。子供に先ず反省するチャンスを与えることです。子供がその美德を見つけたら、誉めてあげます。

子供が美德を現したとき気をつけることは、必ず行為そのものを誉めることです。子供本人ではありません。たとえば「あなたがしたことは気前がいいことだよ。」と誉めます。「あなたは気前がいい。」と誉めるのではありません。私たちはただ美德を現すだけです。私たちは自身が美德ではありません。

次号は私たちの人生で、どうやって美德を身につけていくかを探っていきます。

このテーマについての皆さんのご意見や体験談、またそのときの写真や絵などを「昼の星」にお寄せください。みんなで一緒に考えましょう。待ってまーす。

*道徳と善行をしつけることは、書物上の学問よりもはるかに重要である。清潔で、愛想が良く、立派な人格で、行儀の良い子、たとえ無知であったとしても、無作法で、不潔で、意地悪だが、あらゆる科学や教養に精通している子供よりもましである。なぜなら、立派に振舞う子供は、たとえ無知であったとしても他人のためになるが、意地が悪く行儀が良くない子供は、たとえ学識があっても、墮落していて他人に害を与えるからである。しかし、学識があり、しかも善良であるように子供が訓練されたなら、結果は光の上にさらに照らされた光である。*

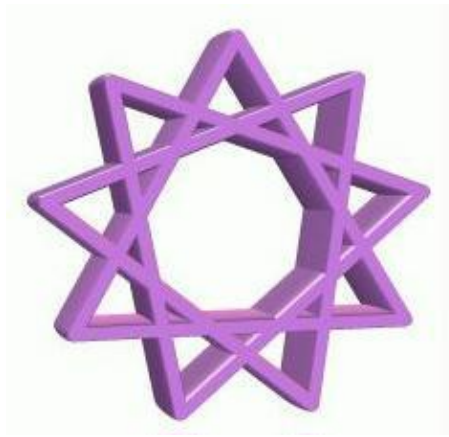
アブドル・バハ選集

### \*短い必須の祈り

神様、あなたが私を創りたまいましたのは、あなたを知り、あなたを崇拜するためでありますことを証言いたします。今こそ私の無力なことと、あなたの御力の大きいなることを、また私の貧しさと、あなたの御豊さを証言いたします。あなたの他に神はいまさず、あなたは危難の中の御救いに在し、御自力にて存在し給う御方にまします。



1. 赤ちゃんが生まれた直後
2. 赤ちゃんの魂になぜ生まれたかを知らせるために
3. 神様の命令によって
4. 神のことを思い出し、考えること
5. 偉大な先生達、この時代ではバハオラ
6. 愛と哀れみ
7. 寛大さと優しさ
8. 正直



皆さんのお子様のバハイ活動でみんなに役に立つ  
いいお話、又は写真などがあれば、送ってください。  
vb7mb7@bma.biglobe.ne.jp に送ってください。

## ひるの星

№. 237

2009年3月発行

ひるの星をカラー印刷するには以下のリンクにアクセスしてください。

<http://www.bahaijpn.com/daystar.htm>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 FAX：03-3204-0773

ひるの星委員会：平原静志、平原ルアナ、マックティアー・理恵

## 協力

物語：尊田イーヴァ、スーザン・ワイコフ、岩倉宣子

和訳：平原静志、平原朝真

写真：サナ・マジズーブ、カレン・ガードナー

表紙：ダリル・マード

絵：ラリー・カーティス、ウィンタースクールの子供たち、平原ルアナ、

ダリル・マード、サナ・マジズーブ

テクニカル・アドバイザー：メイヤー・ニコラス、平原朝真

監修：平野祐一